
東方優漢記

一般人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方優漢記

【Nコード】

N3147BA

【作者名】

一般人

【あらすじ】

孤児院を経営していた老人は、何の悔いもなく死んだ…筈だった。目が覚めるとそこは自分の常識が一切通じない、非常識な世界「幻想郷」だった…。

しかも自分の身体は若返っていて、人ではなくなってしまっている。しかし彼の生き方は変わらない、少しでも孤独を救いたい…そんな優しいおじいちゃんの物語。

終わり即ち始まり（前書き）

初作品で東方とか無謀すぎるだろjk

終わり即ち始まり

私という存在は、もうじき消える。

身動き一つ取れないこの身体が、その証だ。

身体を動かすどころか、呼吸という生物が行う当たり前の行動さえ、今の私には難しかった。

ベットの周りには、老若男女大勢の人間が立ち、皆一様に私の顔を覗いている。

皆、私の息子、娘達だ。中には子供…つまりは私の孫に当たる幼い子供もいる。

孫の一人が言った。

「パパ…おじーちゃんしんじょうの？」

「親父…くっ」

彼は、私が孤児院を開いた時に最初に預かった息子。真っ直ぐで正義感が強い、皆を引っ張ってゆける大人へと育ってくれた。

身体中の感覚がないに等しい、だが、私の心拍を伝える電子音と、皆の話し声はしっかりと聞こえた。

「先生…お父さんは…もう…」

「残念ですが…光太郎みつたろうさんの身体は、もう限界です」

「なんとかならえねえのか！あんた医者だろ！？親父を治せねーのか!?!」

未っ子のあの子は、まだ高校生だ。それ故に、いやだからこそ、私の死を受け入れたくないのだろう。私とて、自分が死ぬなどは考えたくない。だがこれは生きとし生けるもの全ての定めなのだ。今この瞬間、命の灯が消えようとしていると時にも死を恐れている。だが、恐れつつもそれを受け入れなければならない。それが私にできる最後の教えなのだから。

私は、鉄のように重い喉を動かしながら言った。

「良いんだ」

「親父!？」

「お父さん!」

「私が死ぬ事は絶対に避けられない…それは入院したときからわかってきたさ…だが、悔いは、無い」

目だけを動かし、部屋を見渡す。様々な子供達、強い子、賢い子、優しい子…皆素晴らしい私の家族だ。

「君達に出会い、君達を育て、君達と反発しあい、解り合い、助け合い、家族として愛し合えた…私にとって、これ以上の、幸福は、無い」

だから、安心して逝くことができる。

だから、孤児院を託す事ができる。

だから―感謝できる。

「有り難う…」

その一言を言った瞬間、視界が急に狭まっていった。白い部屋は次第に暗黒へと吞まれていく。

電子音がひととき大きく鳴り響く、それは、私の人生の終焉を知らせる音だった。

悲しさはある、だが、後悔の気持ちは一切起こらなかった。

|||||

ゆっくりと瞼を上げる。目の前には、これでもかという程に緑が生い茂っていた。

木々の放つ清涼感のある独特の臭いが、今現在いる場所が森だということを私に理解させた。

思わず首を傾げる。

（私は死んだ筈では？）

人が死ねば三途の川へと行く、というのが私の立っている場所はまごうことなき森。川は有るだろうが、それが三途の川であるということとは絶対に有り得ないだろう。こんなに自然の溢れた場所に脱衣婆はいないだろうし…。

（悩んでいても仕方がないか…）

迷ってしまったらまず行動、それが私なりの生き方だ。

とりあえず川を探そうとして…違和感を感じた。

そもそも私の身体は年齢のせいでボロボロの筈だ。それがどうい

ことか、杖なしでは歩くことも出来なかった脚が、自然と前に出たのだ。
いや、脚だけではない、細胞の老化によってシワだらけになっていた筈の皮膚が、棒切れのように細かった腕が、全て抜け落ちてしまった筈の髪が、まるで、まるで時が遡ったかのように、元通りになっていた。

言葉にできない驚愕と共に、私の第二の人生は始まった。

終わり即ち始まり（後書き）

能力とかいまだ未定、早くも打ちきりになりそうな予感

謎の森の青年

幸いにも川はすぐに見つかった。

川の水は非常に澄んでいた、驚きと焦りに満ちた私の顔が、ハッキリと映るほどに。

「なんだ…これは…」

そこに映るのは、間違いなく私だ。

だが、私の年齢は八十を越えている。同室の入院患者から「若く見える」と言われたこともあったが、それでもそれは八十代には、という意味だ。

だが、今水面に映し出されている私の姿は、明らかに老人の身体ではない。

「三十…いや、二十を越えた辺りか？一体どうして…」

まるで頭のなかを掻き乱された気分だ。

現状に思考が追い付いていない。

気がつけば、その場にへたりこんでいた。

「一体どういうことなんだ…」

空を見上げて呟く、もちろん返事は帰ってこず、真つ青な空の中を白い雲が通りすぎていった。

|||||

自分が子供の作れない身体だと知ったときのショックは大きかった。孤児であった私は、せめて自分の子供だけは精一杯幸せにしてあげようと思っていたからだ。

それ故に、私は必死になって働いた。

働いて働いて働いて働いて働いて――周囲から社長と呼ばれる頃にはもう三十を過ぎていた。

だが、そんな私の努力は、担当医師のたった一つの言葉でアッサリと崩れていった。

造精機能障害

精巣が十分な精子を生み出せないことを示す病状。

先天的なものらしいが、私の症状は特に酷く、精液中に一パーセントの精子も見つからなかった。

そして、治す手段は無いそうだ。

無論、私は絶望の淵へと叩き落とされた。

今までの全てが無駄だったと言われたのだ、当然とも言えた。数日は食べ物が喉を通らなかった。

だが、すぐに希望が芽生えた。

（作れないなら、引き取るっ）

その日から、私は国中の孤児院や養護施設を巡った。

そして、出来る限り子供を引き取った。

もちろん、周囲からは反対されたが、一切気に止めることはしなかった。

少しでも、孤独を救いたい。

その思いが、私の原動力だった。

子供達とは、最初はあまり上手く接することは出来なかったが、それでも次第に解り会うことができた。

そして少年少女は大人になり、仕事に就き、恋をし、新たな命を産み出してくれた。

幸せだった。

身体は子が作れなくても、私には両手では数えきれない程の息子や娘が出来たのだ。

だから、死ぬことにも一切悔いはなかった。

それなりに私は生きている。しかも若返った姿で、だ。

|||||

「ん…む」

意識が覚醒していく、どうやら少し眠っていたらしい。

目の前には相変わらずの青空。時間はそれほど経っていないようだ。起き上がり水面を見つめる、やはり私の身体は若い頃のままだ。

「これからどうしたものか…」

腕くみをして考える、なにしろ自分がどこにいるのか、なぜここにいるのか、さっぱり理解できていないのだ。とにかくまずはこの森のような場所を抜けなくては、川の流れに沿っていけばいずれ町につくだらう。

そう考え、私は歩き始めた。

暫く歩き続けると、後ろでガサツと何かが動いた音がした。思わず振り返って身構えた。

木々の間を縫って出てきたのではない…長身の青年だった。

艶があり、銀にも見える白髪を持ち、眼鏡の奥から金の瞳が覗いていた。青と黒を主体とした特徴的な服を着用じ、首には黒いチョーカーを付けている。

「おや、珍しいね。魔法の森に人がいるなんて」

先に口を開いたのは青年だった。

安堵のため息を漏らしながら、私は聞いた。

「この近辺の人かい？」

「ええまあ、この森の入り口で古道具屋を営んでいるんだ」

「そうか…人に会えて良かった。もしそちらがよければ町まで」

案内してくれないか。

そう言おうとした時だった。

突如、私の身体が横に吹き飛ばされた。

ガン！

木かなにかにぶつかったのだろうか？凄まじい衝撃に打つちつけられ、ドサリと倒れこんでしまう。

(いったい…何が…？)

さっきまで立っていた場所を見ると、青年が何かと対峙していた。巨大な狼。そう言い表すしかない程の巨体。血走った眼で青年を睨み付けている。よほど興奮しているのか、口からはダラダラと涎が垂れていた。

対する青年は逆に氷のように落ち着いていた。冷やかな瞳で狼を見つめ、いつ取り出したのか、その手には一本の刀が握られていた。再び意識が落ちていくなか、私が最後に見たのは狼が青年に飛びかかり、青年が刀を抜き構える光景だった。

謎の森の青年（後書き）

後になって考えたらおじいちゃん気い失いすぎじゃね？

ここは違う世界

見覚えのない天井。

視界一杯に広がる光景に一瞬戸惑ったが、すぐ後に訪れた痛みがそんな思考を吹き飛ばした。

稲妻に貫かれたような、そんな激痛が体中を駆け巡った。

「ガッ…ハッ…！」

全身から汗が噴き出る。

そのまま痛みが収まるまで一切の身動きが取れなかった。

「ここ…は…？」

眼だけを動かした辺りを見回す。

小さな個室、和風の今では珍しい畳の部屋。その真ん中にひかれた布団に、私は横になっていた。

ガラ

突然襖が開かれる。

そちらに顔を向けるとそこには女の子が立っていた。

黒と白の二色で構成された服、魔女の被るようなとんがり帽子のせいで彼女まで魔法が使えるそうな雰囲気だ。女の子は私を見ると、隣まで駆け寄ってきた。

「お！目が覚めたんだな。おーい香霖ー！！お客さん起きたぜー！」

少女がそう叫んでからすぐに、奥からまた一人部屋に入ってきた。

気絶する前に出会った青年だ。
青年はいかにも気怠そうな表情で口を開いた。

「大声を出さないでくれ…久しぶりに運動して疲れてるんだ」

「いつもここに引き籠ってるからだろ？たまには私みたいに思いっきり体を動かしてだな…」

「ハイハイ、僕は彼と話があるから魔理沙はちょっと店を見てくれ」

青年のその言葉に少女は頬を膨らましながらも部屋を後にした。
なんというか…まるで兄妹のようだ。

「さて、身体のほうはどうか、一応応急手当はしたんだが」

「かなり…痛いね」

「それはよかった、生きてる証拠だよ」

「それは…そうとも言えるね」

彼の言った冗談に、少しだけ気持ちが軽くなった気がした。

「まずは自己紹介…かな。僕は森近霖之助もりちかりんのすけここで古道具屋を営んでいるんだ」

気絶する直前の彼の言葉が浮かぶ。そういえばそんなことを言っていたな。

「あの狼はどうなったんだい？」

「ああ、奴のことなら心配ない。一度と君を襲うことはないよ」

「つまり……」

「殺したよ」

あっさりと衝撃の事実を暴露する霖之助くん。

「よっぽど腹が減っていたんだろうね、こつちの話に一切耳を貸さなかつたよ。僕も大人しく喰われるのはまっぴらゴメンだからね」

「君が…あの狼をかい？」

「狼は狼でも、妖狼ヨウリウだけどね」

妖狼

初めて耳にする単語に私は首を傾げた。そんな私を見て霖之助くんはふ〜むとうなり、顎に手を当てた。

「その反応からすると…君は外人人なのかな？そもそも魔法の森に幻想郷の人間が用があるとは思えないし……とするとまた彼女か？いや結界が緩んだのかそれとも……ブツブツ……」

なにやらいきなり独り言を言い始めた。私自身も色々質問したいのだが話しかけるタイミングが全く来ない。

「霖之助さーん服の繕いお願いしたいんだけど……ってあら？」

霖之助くんの変貌に呆気にとられていると、また誰かが部屋に入ってきた。

さっきの少女かと思ったが違った、少女であることには変わらなかったが、さっきの少女が黒と白ならこの少女は紅と白を基調とした服だ。部屋の中を覗いたその頭にある紅の大きなリボンが揺れる。

「あら、お客さんいたの？まあそれはどーでもいいとして…ちょっと霖之助さん聞いているの？もしもーし」

「イヤまでよ……ブツブツ……となるとこういうことが……しかし実際に……」

「…ていつ…」

ドッ
ッ

「グホッ」

「あ…」

紅白の少女の放ったチョップが霖之助くんの頭を捉えた。それはもういい音が鳴った。

「霖之助さん！聞いてる？」

「あれ霊夢いたのかい？」

「気づいてなかったのね…まあいいわハイこれ直しといて今すぐ」

少女から服を受け取り、霖之助くんが渋い顔をする。

「またか…今すぐ、ってそんなに速くは仕上がらないよ。取り敢えずこっちに座り……」

「お茶飲んで待ってるからお願いなー」

ひらひら手を振りながら紅白の少女は部屋を出て行った。

霖之助くんは諦めたように溜息を吐き、私はそんな彼の姿に自然と笑ってしまった。

「つまり…ここは私がいた世界ではないということだね？」

「ああ、ここは『幻想郷』。非常識が常識となる世界さ」

現在部屋には私、霖之助くん、魔理沙ちゃん、霊夢ちゃんの四人がいる。

彼らから伝えられたのは非常に驚くべきモノだった。

私が生きていた世界、そこでは機械や化学が発達して非常に便利な世界だった。しかし技術の進歩の裏で誰にも気づかれずに消えて行ったものもあつたのだ。

それは妖怪や神といった伝承や御伽話の中でしかない信じられていた存在達だ。

それらは人々の信仰や畏れがあつてこそ存在できるらしい、しかし人間はしだいに機械を使い、魔法を使わなくなり、神ではなく己が生み出した科学を信じるようになった。

その結果、『幻想』は自分達の存在を守るために小さな国を作り、周囲には強力な境界を張った。

その国は、外の世界とは違い精神や魔法を中心とした独自の文化を

築き上げた。

それこそが『幻想郷』であり、現在私がいる世界なのだそうです。世迷言だと言えばそれまでだ、だが不思議なことに私は自々自然とこの話が本当なのだと思え入れた。

理由はわかっている。私の存在自体が、すでに幻想に近いからだ。本能的に理解したからだ。

「それにしても死んだらここにいてしかも若返ってるなんて変だよな、普通は死んだら三途の川を渡るもんだぜ」

三人には私が一度死んだ人間であるということと話した。驚かれはしたものの、「えええっ!？」ではなく「ふーん」といった反応だった。

あの時私は確かに死んだ。死んだことを憶えている、というのはおかしな話だが、とにかく死亡したのは確かだ。心臓が止まり、目の前どころか自分の全てが真っ暗になる感覚。思いつくのは恐ろしいが、あの時の私には一片の悔いもなかったはずだ。

私はお茶を啜る霊夢ちゃんに聞いた。

「私のような…死んでからここに来る者はいるのかい？」

「いるっちゃいるけど…生き返ったり若返ったりするのは無理ね。死んだらそのまま幻想郷で三途の川を渡るわ」

「少なくとも今までそういう現象は起きていないね、僕も無縁塚にはよく行くけど死体が生き返ったところはまだ見てないな」

腕を組んでうなる。ふと窓の外を見ると、夕日が山に隠れ始めているのが見えた。

「とりあえず今日はもう遅いから二人は帰りなさい。女の子が暗くなるまで出かけちゃイカン」

「その意見に賛成だね。霊夢、服は直しておいたから魔理沙を連れてってくれ」

「えー！？もうちょいだけいいだろー？」

「文句言わないの…それじゃあね霖之助さん。それと…名前なんだつたかしら？」

「光太郎だよ。神谷光太郎」かみやこうたろう

「そ、またね光太郎さん」

「じゃーな光太郎！」

元気よく駆け出していく少女二人。それを手を振って見送った。急に静かになった部屋で霖之助くんに言った。

「元気で良い子たちだね」

「少々元気すぎるけどね、まあいまさら腐れ縁は切れないさ」

その後、身体に痛みを、心に少々の期待を持ちながら私は眠りについた。

名を変え、生きていく

さて、次の日から私の日常は大きく変わっていくことになったのだが……まず初めに私が人間でなくなっていたことが判明した。

目覚めると昨日までの痛みが嘘のように引いていたのだ。それはもうすっかりはつきりすつきりと。

不気味に思っただけで霖之助くん相談したところ、驚きの返答が返ってきた。

『おやこれは……人じゃなくなってるね』

『はい？』

なんでも霖之助くん曰く、昨日は感じなかった力を私から感じるらしい。

とにかく専門家に診てもらおうということになり、やってきた専門家は……霊夢ちゃんだった。

霊夢ちゃんは巫女をやっているらしく、あじえないことこつこつに精通しているらしい。そして調べてもらった結果。

『結果から言えば光太郎さんの身体は人間じゃなくなっているわ、だから怪我の治りも早いしよっぽどのことじゃ死ななくなってるわ多分老いもこないんじゃないかしら』

『ほ、本当なのかい？』

『嘘言ってもしょうがないわよ。でもわからないことが一つだけあるわ』

『わからないこと？ いったいなんなんだい？』

『人じゃない何かのは確か、でもその何かがわからないのよ』

『ええと……つまり？』

『幻想郷にはいろんな奴等が住んでるのよ。天狗や河童みたいな妖怪はもちろん、魔法使い、妖精、幽霊、神から悪魔までそれこそ世界中のありとあらゆる幻想がこの世界にいるの。でも光太郎さんから感じる力はそのどれにもあてはまらないのよ、少なくとも私の知る範囲ではね』

『だとしたら……私はいつたい……』

急に自分自身が何なのかわからなくなる、その時の私にとってその事実はとても恐ろしいものだった。

しかし、そんな私の恐怖は霊夢ちゃんの一言でアッサリと消え去った。

『気にしなくていいんじゃない？ 光太郎さんは光太郎さんなんですよ？』

彼女にとっては何気ない一言だったのかもしれない。だが、その言葉聞いた瞬間、今までの記憶が走馬灯のように駆け巡った。

親の顔も知らず孤児として生まれ、自分の子だけは絶対に幸せにして見せると誓い勉学に励み一流企業に入社、入社直後からひたすら働き続けた。

私の功績は認められ、気がつけば社長という座に就いた、そしていざ子供を作ろうとしたときに知らされた報告。

私を絶望のどん底へと叩き落とした診察結果。だがそれでも私は諦めなかった。

自分と同じく孤独に蝕まれた子供達、今度はその子供達を一人でも多く救いたいと願った。

一人目を引き取り子育ての難しさを知り、二人目を引き取り子供同士の喧嘩を仲裁し、三人目を引き取り子供にも悩みがあることを知った。

私財をなげうつてひたすら子供を引き取り続け、十人目を迎えた頃には自分の孤児院『ひまわり』を所持していた。

私は孤独が恐ろしかった。

誰にも知られず、誰にも話しかけられず、誰にも自分という存在を認知してもらえない。

その恐ろしさを知っているからこそ、この気持ちを子供に味わってほしくなかったのだ。

偽善者だと言う者もいた、まったくもってその通りだ。

私はただの寂しがり屋だ、私が行っているのはただの好意の押し付けに過ぎない。自分への嫌悪感に押し潰されそうな時もあった。だが子供達は……そんな私に感謝してくれた。

『親父…有り難う』

『お父さん……有り難う』

『有り難うな……父さん』

その言葉が、どれ程の力になったか！

その笑顔が、どれ程の助けになったか！

そうだ、私は偽善者だ！血の繋がりのない他人に金を使うような愚

か者だ！

それで構わん！それこそが私、神谷光太郎だ！！

その生き方は変わらないこれまでも、そしてこれからも！

『あ…あ…… ああああああ！！！！』

気がつけば全力で泣いていた。

突然泣き出した私に驚いた霊夢ちゃんや霖之助くんが駆け寄ってきたが、そんなことも一切気に留めずに私は泣き続けた。

頬を伝う涙は熱く、その一つ一つに私が知らぬうちに溜め込んでいた恐れや戸惑いを宿していた。

『あああああああ！！！！』

だから私は、ただ只管に泣き続けた。

。

自分の中の負を一通り吐き出した後、これからどうやって生きていくかという話になった。

なにしろ私はこの世界では余所者なのだ、こちらで生きていくための知識など一切無い。

しかしこの悩みは以外にアツサリ解決した。

『それなら香霖堂こいで働くといい』

霖之助くんが言うには香霖堂では私がいた世界の道具も置いてあるらしい。しかし霖之助くんには『名前と用途』しかわからないらしく、肝心の『使い方』はわからないというのだ。

そこまでわかっているのに何故？と疑問を投げかけたところ、霖之

助くん自身の力が『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』だからだそうだ。ちなみに霖之助くんは妖怪と人間のハーフラしい。

そこで私に今まで集めたあちらの道具の使い方を教わるついでにこの店の従業員として住み込みで働いてほしいとのことだ。

断る理由などあるはずもなく、私はその提案を喜んで受け入れた。

さて就職先と寝床が一気に決まったのだがまだまだ問題は山積みだった。

次に私の前に立ちふさがったのは自分の身をどう守るかという課題だった。

妖怪と人間が共存する幻想郷でもその社会の在り方の奥底には弱肉強食という自然的な掟があった。

弱者は強者に虐げられる。

私がこの世界に来て初めての出来事。そう、妖狼に襲われ、霖之助くんに救われたあの事件だ。

頻繁に、というわけではないが幻想郷ではあのような事件がよく起こっているのだと霊夢ちゃんと言う。

妖怪は人を襲い、人は妖怪を退治する。現代日本ではなくなった営みがここ幻想郷では行われていた。

それはさておき、問題は私が自衛の手段を全く持っていないということだった。

『えー、光太郎は空飛べないのか？』

『魔理沙ちゃん、向こうの人は生身で空を飛んだりはしないんだよ』

『じゃあ私が鍛えてやるぜ！』

『本当かい？それじゃあお言葉に甘えさせてもらっつよ』

『おう！魔理沙先生にまかせとけ！』

この後、いきなり巨大レーザーを撃ち込まれてまた泣きそうになった。

女性や子供同士なら『スペルカードルール』という射撃ゲームで勝敗を決めるらしいが、それは女子供の遊びとして大人の男性には浸透していないらしい。

とにもかくにも頼もしくも可愛らしくそれでいて手加減を知らない魔理沙先生は私が自分の身を守るようになるまで私を特訓してくれることとなった。

ちなみに霊夢ちゃんは幻想郷の結界の管理者らしく、外の世界から迷い込んだ人間を外の世界に返す役目もおっているのだそうだ。そして、一応務めだからと言って、私に外に帰る気があるか確かめてきた。そしてもし帰る気なら外に出してあげると。

その問いを、私はスッパリ断った。

『私はあちらではもう死んだ身だ、死人がいつまでもいてはいけな
いだろう？それに私はこの世界を見たいと思うんだ、この非常
識が常識となっている世界をね』

霊夢ちゃんは『そう』とだけ答えて、そのまま何も言わなくなった。

そして、新しい人生を開始するために私は名を変えた。といっても
気持ち的な問題なのでたいして変えてはいない『朗』を抜き取り、
私は光太と名乗ることにした。

劇的ピフォーなんとか 霧雨魔法店編

時が経つのは早いもので、私が香霖堂で働き始めてもう一年が過ぎた。

今日も私は朝六時に起きて店の外に出て早朝の冷たい空気を肺一杯に吸い込んだ。そしてラジカセのスイッチを入れる。

）

聞こえてくるのはお馴染みのラジオ体操第二の音楽。

流れる声とともに私は身体を動かし始めた。

入院する以前は毎日続けていた日課だが、まさか新しい人生でも行うとは思わなかった。

それもこれも香霖堂でラジカセが見つかったおかげだ。

まあ……霖之助くんの『これは電波というものを受信し音を流す、電波とは恐らく雷のことだ、つまりこれは外の世界が生み出した避雷針なんだよ！』の発言には度肝を抜かれたがそれは置いておこう。

やがて音楽も止んで体操を終えた私は店に戻り、台所で朝食を作ることにした。

この一年で霖之助くんの食事バランスを劇的に良い方向へと傾けたと自負できる。

たまに霊夢ちゃんや魔理沙ちゃんが混じって食事をするが、皆いつも美味しそうに料理を食べてくれる。

そんな表情が見れるのは純粹に嬉しい。

朝食を摂り終わると店の仕事をするわけだが……ハッキリ言って客が来ることは滅多にない。

人が来ることはあるだが、純粹に客として来店する人は殆どおらず、

この一年で客として訪れたのはメイドの十六夜さんぐらいだ。よって私の主な仕事は清掃と商品の陳列や整頓のみになってしまふ。これは問題があるのではないかと霖之助くんは掛け合ったが、店主は別段気にしていないらしい。

かつては私も経営する立場だったが、ここまでのんびりとした店は初めてだ、しかも霖之助くんは気に入った物を非売品にしてしまうからそれが店の不景気に拍車をかけている。

まあ給金を貰っている立場だから文句は言えないのだが。

今日も今日とて掃除と陳列を終え手持無沙汰になったのでお茶を淹れて二人して啜る。カウンターに二人並んで恐らく今日は開かないであろうドアを眺めた。

ズズツ……

「暇だね光太」

「そうだね、霖之助くん」

ズズツ……

「今日はもう上がっていいよ。どうせ客は来ないから」

「店主がそんなこと言っちゃいけないよ。経営者たるもの、常に社員を強気で導かないと」

ズズツ……

「じゃあ一つ仕事を頼んでいいかい？」

「そろそろその意気だよ」

ズズツ……

「魔理沙に届け物をしてほしいんだ、ちょっと作ってくれて依頼されてね、モノは出来たから魔理沙が来た時に渡そうと思ってたんだが彼女が最近こないからね」

「それで私に届けてほしいわけだね……ちなみに自分が行くという選択肢はないのかい？」

ズズツ……

「僕が外に出るのが面倒だって思ってるのはもう知ってるだろう？」

「やれやれ……」

出不精な店主に溜息を吐きながら、私は立ち上がる。
届け物を手にし、私は店のドアを開いた。

|||||

この森を自由に移動できるようになったのは半年前くらいからだろ
うか。最初は妖怪に遭遇しても逃げるのが精一杯だったが、一か月
程で対等に渡り合い、三か月経つ頃には撃退することが可能になっ
た。

その後も着実に力をつけ、今ではこの森の妖怪相手数十匹相手に
無傷で勝利を収めることができるようになった。

(先生の教えの賜物だねえ)

これから会いに行く少女の顔を思い浮かべながら微笑む。特訓は最初はつらいものだったが、私の身体が人間として全盛期を迎えていたことも幸いして、次第に楽しいものへと変わっていった。彼女との特訓は私が死ぬ前の息子達と遊んでいた時のような懐かしい気持ちを思い出させる……。まあ未だに空を飛ぶのは苦手なんだが……。飛べないわけではなく、あの浮いたときに内臓を引っ張られるような感覚がいつまでたつても馴れないのだ。そんなことを考えていたら、魔理沙ちゃんの家の前に到着した。

『霧雨魔法店』と書かれた看板を掲げる小さな小屋を見上げ、その戸を叩いた。

「魔理沙ちゃん、いるかい？」

返事はなかった。

魔理沙ちゃんは活発でよく出かけているのを見かけるが今日もそうなのだろう。

しかし私も霖之助くんから頼まれた身、ここで帰るわけにはいかない。悪いと思いつつも扉を開けた。

「お邪魔するよー」

ギィ……と軋む音はたてながら戸は開いた。

そして私の目に飛び込んできたのは

「じ、これは……!？」

大量のゴミの山だった。

見渡す限りゴミゴミゴミ……。

足の踏み場もない、という言葉があるがまさにその通りだった。とにかくこのままでは目的を達成できないので

「よし……」

足に力と意識を集中させる。

見えない力が形成され、私の身体は宙に『浮いた』

相変わらずこの浮遊感には馴れないが、今は我慢だ。

ゆっくりとゴミの上を移動し、屋根裏から家全体を見渡した。

よくもまあここまで溜め込んだものだ、本や見たことない道具や空の箱やら……。

少なくとも女の子が一人で暮らす部屋ではない。

「……掃除……だね」

眩きながら、私は箒を取り出した。

|| || || || || || || || || ||

「まったく……こんなところで眠って……」

さて結果から言えば魔理沙ちゃんの家はきれいさっぱり片付いた。これでも何人もの子供を育ててきた身だ、なんということでしょうという声が聞こえてくるくらいの仕事はしたつもりだ。そして肝心の家主は、よりもよってゴミの中お腹を出して横になっていた。

「くー……くー……」

「よいしょ……っと」

小さな身体を背負う。本当に小さくて、華奢な身体だ。特訓の時、私に容赦なく放たれる極太レーザーがこの細腕から生まれるとは未だに信じ難い。

魔理沙ちゃんは、この家で一人で暮らしている。

ご両親はいるが、絶縁状態らしい。

その理由を霖之助くんに聞いたが……それは話せないと断られてしまった。

何があつたのかはわからないが、魔理沙ちゃんがどんな気持ちを味わつたのかはなんとなく想像がついた。

私は親の顔も知らない、しかしこの子は親がいながらその親に拒絶された。本来なら自分を守ってくれるはずの信頼できる存在、それが敵になるというのはどれ程辛いのだろうか？

「さあついたよ」

寝室のベットに寝かせ、布団をかぶせる。

自然にやや癖のある金髪を撫でていた。

（辛いだろうけど……君は孤独じゃないよ。私や霊夢ちゃん、それに霖之助くんがいるだろう？）

寝室にあつた机に届け物を置き、私は霧雨魔法店を後にした。

劇的ビフォーなんとか 霧雨魔法店編（後書き）

なんということでしょう。

紅い霧

いつものように、私は魔法の森を歩いていた。

いつものように、妖怪が私を襲ってきた

いつものように、私は妖怪を撃退した。

いつもと違って、幻想郷は紅い霧に包まれていた。

「さて、早く紅魔館に行かないと……」

私の眩きは、紅い霧の中に消えていった。

。

この霧が出現したのは第百十八季の夏のある日だった。

私は人里に買い出しに来ており、その日はたくさんの食材を買った。それに気づいたのはあることがきっかけだった。私はすれ違つ男性と肩をぶつけてしまったのだ。

「ツと、すみません大丈夫でし……？」

男性は私の言葉を見無視して過ぎ去っていった。それだけならまだよかった、私も気にせず帰っただろう。

しかしその後、男性は突然地に倒れ伏したのだ。もちろん私はそのまま駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか!？」

男性の顔は青ざめており、呼吸はしていたが非常に苦しそうだった。気がつけば私は野次馬に囲まれていた。

何があったのかと皆一様に首をかしげていたが、そのうち恐ろしいことが起こった。

集まった人々も、男性と同じように倒れていったのだ。

老若男女、ことごとく、その場に崩れ落ちていった。

当然、辺りは悲鳴と喧騒に包まれた。

そんな中私は目撃した。

さつきまで自分たちを照らしていた太陽が、血のように紅い霧に覆い尽くされる様を。

結局その後、霧は侵食を続け人里を完全に包んでしまった。

私はひとまず倒れた人達の救助を優先した、人里に住み着いているだけあり、ほかの妖怪達も快く協力してくれた。

救助活動を指揮した慧音さんとは何度か顔を合わせたことがあり、救助はスムーズに終了した。

しかし霧が人里を覆っている現状は変わらなかったが、霧については一つだけわかったことがあった。

それはこの霧は、人間には有害だが、私のような人外には無害だということだ。

もしもすべての生物にとって有毒ならば、今頃人里は全滅していただろう。そういう意味では人じゃなくてよかったと思える。

その日は急いで帰り、霖之助くんの無事を確認して心の底から安堵した。霖之助くんは半妖であると同時に半人だ、もしものことを考

えていたが、杞憂に終わってよかった。

そして次の日、私は慧音さんと話しをした。

慧音さんは昨日のうちに霊夢ちゃんのところへ赴き、早急な原因究明を依頼したらしい。

しかし帰ってきた答えは、彼女が望んだものではなかった。

… 普段の霊夢ちゃんを見れば、もしかしたらこうなるのではないかと私は思っていた。

彼女は非常にめんどくさがり屋だ、しかしまさか本当動かないとは…。

『里の者が苦しんでいるというのに、博麗の巫女は動こうとしない！何故だ！？異変を解決するのが巫女の役目ではなかったのか！？』

泣きながら畳を殴り続ける慧音さん、人を愛している彼女にとって今の現状はどれ程の苦痛なのだろうか。

その姿を見て私は 決心した。

慧音さんの手を掴み、身体をこちらに向けさせる。涙に濡れるその眼をしつかりと見つめた。

『こっつ…た？』

『私が、なんとかします』

この霧のせいで、人々が苦しみ、その姿を見て慧音さんが苦しむ。この負の連鎖を断ち切ると、誓った。

もちろん慧音さんからは反対された、しかしこういう時意外と子育て

ての知識が役立つもので、子供を泣き止ます知恵を使って慧音さんを落着かせた。

『霧の出所はわかりますか？』

『あ、ああ。昨日のうちに里の妖怪達に協力してもらったよ。霧は紅魔館から出ていた』

『紅魔館：ですか』

幻想郷には妖怪の山と呼ばれる一際高い山がある、その麓にこれまた霧の湖と呼ばれる美しい湖があり、その畔に建つ洋風の館が紅魔館だ。

その名の通り紅い色調をしていて、館の前の道も一面の紅になっている。

そして館の主は吸血鬼だと言われている。

一度だけ魔理沙ちゃんに（無理やり）連れて行かれたことがあるのを見た目は印象に残っている。：まあその時は空中から落下して大怪我を負ったが。

私は紅魔館の主に霧のことを問い詰めてくる、と慧音さんに言った。彼女はしばらく黙って目を閉じていたが、やがて私を見てこう言った。

『死にそうになったら必ず逃げてくれ』

私は笑顔でハイと答えた。

|||||

香霖堂に戻った私は霖之助くんにこれからのことを伝えた。
彼は特に何も言わある物を私に手渡した。

『暇潰しに作った対妖怪用の道具さ、帰ってきたら感想を聞かせてくれ』

『…有り難う』

『従業員が減るのは困るからね、それに光太の料理は結構気に入ってるんだ。ま、死なないように頑張るといいよ』

決して素直とは言えないが、その言葉からは私への確かな気遣いが感じられた。

「……………急ぐっ」

歩く速度を僅かに上げる。今こうしてる間にも苦しんでいる人がいる、その姿を見て心を痛める人がいる、そして私の帰りを待たれていてる人がいるのだ。
霖之助くんに教わった近道である魔法の森を進みながら、私は拳を握りしめた。

小さな者に懐かれて

「えへへー」

現在…魔法の森に入って数時間、もう少しで森を抜けようかという地点だ。

私の頭の上には、一人の女の子が乗って…もとい、しがみついていた。

なにが楽しいのか、時折笑いながら私の首に抱きついてくる。

「…ととつ、ルーミアちゃん、あんまり動くと落っこちちゃうよ」

「浮いてるから平気だもん」

「やれやれ…」

この子…ルーミアちゃんは妖怪の少女だ。今私はこの子と一緒に紅魔館に向かっている。何故こんな状況になったかというところ。

腹をすかせて襲いかかってくる妖怪を撃退しながら森を進んだ私だったが、突然空飛ぶ黒い球体が目の前に現れた。

何だろうと思いついその球体に手を突っ込んだが…何かが手に当たった。ついつい好奇心に負けてその何かを引っ張り出した結果、出てきたのはなんと幼い女の子だった。

黒いが、袖の部分のみは白いドレス調の服、小さな可愛らしい顔と、大きなリボンの付いた短い金髪が目の前で揺れた。

少女はニツコリと笑うと私にこう言ってきた。

「ねーねー、あなたは食べてもいい人間？」

その言葉でこの子が妖怪なのだと理解した。

さて、いくら妖怪とはいえ、こんな幼い女の子を倒すわけにはいかない。私は少し考えてこう言った。

「ごめんね、私は食べられるわけにはいかないんだ。代わりにこれをあげよう」

そして懐から取り出したおにぎりを少女にあげた。

「わー！おにぎりだー！」

嬉しそうにかぶりつき、一口で食べてしまった、よっぽど空腹だったのだろう。

その姿を見て、初めて手料理を食べてくれた娘の顔を思い出した。そして気がつけば、少女の頭を撫でていた。

「ふぁ……」

考えてみれば、この子が飢えているのもこの紅い霧のせいだ。

魔法の森は気軽に人が訪れることができる場所ではない、森が発する禍々しい瘴気が人を拒むからだ。それ故に人食いの妖怪達はあまり住みつこうとはしないのだが……瘴気に耐えられる一部の人間を狙って住み着く妖怪もまた存在するのだ。

この子はきつと後者だろう。まあこんな女の子が口元を血で染める姿など想像できないのだが……。

(どちらにせよ早くこの霧を止めないといけないな……)

「ん〜…えへへ〜」

その声で自分が未だ頭から手を離していないことに気づいた。
とっさに手を引っ込める。

「っとすまない、失礼だったね」

「あつ…やめちゃうの?」

何故か少し悲しそうな顔をする女の子。

「大事な用事があつて急いでるんだ。それじゃあね」

少女の横を通り抜けようとして

服の袖を掴まれた。

「……なんだい?」

「あのね、一緒に行つていい?」

「……ええ?」

。

とまあそんな具合に、どうやらこの小さな人食いに懐かれたようで、
一緒に紅魔館を目指しているわけだ。

断ろうと思つたが、こんな幼い子供が上目づかいで必死にお願いし
てくるのだ。

それがおもちゃをねだる孫の姿と重なって、私に拒否権をくれなかった。

「ねーねー、お兄さん」

「おに……できればお爺さんと呼んでくれるかい？」

「えー？でもお爺さんに見えないよ？」

「こつ見えても私はお爺さんなんだよ」

「そーなのかー。じゃあお爺さん！」

「なんだい？」

「えへへー、それ！」

その声が聞こえた途端、急に目の前が真っ暗になった。突然の事に足を止め、その場に立ち止ってしまふ。

「こ、これは？」

「すごいでしょー」

暗闇の中にルーミアちゃんの声が響く。

「ルーミアちゃんの力なのかい？」

「うん、私はね『闇を操る程度の能力』あるんだよ」

そういえば……彼女とであった時、黒い球体に包まれていたがあれはルーミアちゃんの力だったのか。

……って感心してる場合ではない、これでは危なくて前に進めない！

「とりあえずルーミアちゃん、前が見えないからこれを解いてくれるかい？」

「はい」

その声と共に目の前に黒以外の色が戻ってくる。

「有り難う、良い子だ」

「えへへー」

頭を撫でると猫のように目を細めた。

。

ルーミアちゃんを頭に乗せながら歩き続け、とうとう魔法の森を抜けることができた。

そして私たちの目の前に、大きな湖が映った。

しかし、本来なら太陽の光を反射して輝くはずの水面は今は赤黒い空を写し、血のような色をしている。

そしてその湖の向こう……湖を挟んで私達のちょうど反対側にそびえたつ洋風の館。

私の目的地紅魔館は、物言わず不気味に私たちを見下ろしていた。

なるほど、たしかに館の頂点からまるで煙突の煙のように紅い霧が

吹きだしている。霧の出所が紅魔館だというのは間違いないようだ。

「よし……」

私は決意を新たに、一步を踏み出そうとし

「えいつー！」

「とりやつー！」

ドンッ

「うわっ！？」

地面に転んだ。

「アハハ、転んだ転んだー！」

「やっぱりあたいつたら最強ね！」

「お、おじーさん、大丈夫！？」

倒れた姿勢のまま、顔を持ち上げる。

そこには二人の少女、身長や幼さはルーミアちゃんとそう変わらない。

片方は水色の髪、背中にはパタパタと動く一对の羽があり、いかにもしてやつたりといった感じの笑顔で私を見下ろしている。

もう片方は薄緑色の髪の左側の一部を黄色いリボンで束ねており、やはり背中には羽がある…しかしこちらは昆虫の羽を思わせる形をしている。

恐らく、妖精なのだろう。

「あ、起きた」

「につげるー！」

その言葉を合図に私に背を向けて空へと逃げる妖精二人組。

私は特に慌てることなく、立ち上がり、懐に手を入れ、ある物を取り出す。

ルーミアちゃんが目を丸くして尋ねてきた。

「なあにそれ？」

「コンパクト打神鞭だしんべんだよ」

「コンパクトだしんべん？」

見た目は普通の刀である、ただし刃の部分はなく、柄と鍔までしかないが。

しかしこれに力を籠めるとあら不思議、光の刃が出てくるのだ。この光の部分は普通に物を切ったりすることもできるし、私が望めば様々な物に姿を変えてくれる。
なので

「ふんっ」

このように伸ばして鞭にもできるし

「フンッ」

長さも自由に変えられるし

「パシッ」

「あれ？」

「へ？」

悪戯妖精を簡単に捕まえることもできるのだ。

「降りてきなさい」

柄を振り下ろす。

「「キヤアアアア！」」

ドスン！

うむ、実に便利だ。帰ったら霖之助くんに礼を言わないと。

「さて……お説教するのは久しぶりだが、悪い子は叱らないとね」

頭から地面に突き刺さる妖精達を見ながら、私は呟いた。

。

「ふむ…またこの霧が原因か」

この二人…大妖精ちゃんとチルノちゃんによると、人間が姿を見せなくなってしまうたので退屈していたところをちょうど私が通りかかったためにさっきのようなことをしたらしい。

妖精にとって悪戯は生きがいらしく、霧が出る前もよく二人で悪戯していたらしい。

元気があるのはたいへん良いことなのだが……。

「まあ、そういう性質なら叱るだけ無駄か…どうせ私が怒っても悪戯は止めないのだろう?」

「当然!」

「あたいつたら最強だからね!」

「うむ、素直でよろしい」

打神鞭に籠めていた力を解き、二人を解放した。自由になった二人は宙に浮かび上がり私の前に寄ってきた。

「ありがとう」

「あんた見込みがあるわね。あたいの子分にしてあげてもいいわよ!」

「ハハ、子分は遠慮しておくよ。私はこれから紅魔館に行くから失礼するよ」

二人の間を縫って紅魔館に足を進めようとして 服の袖を掴まれた。

「……何か?」

「「暇だから連れてって!」」

あれ? 既視感が……。

小さな者に懐かれて（後書き）

ロロロンっ？いいえおじいちゃんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3147ba/>

東方優漢記

2012年1月12日01時55分発行